

【小・中学生の部受賞作】

なぜ京都にはお地蔵さんが多いのか

京都市立御所東小学校3年 河内 里香

去年の夏休みに、私は京都に引っ越してきました。そのとき最初に思ったことは、どうして京都にはお地蔵さんがたくさんあるのだろうかということです。去年、私は自由研究で「うばがばしのお地蔵さん」について調べたので、京都のお地蔵さんが気になりました。100mぐらいの細い道にお地蔵さんが5つもありました。家のしき地にお地蔵さんがあって、向かいのマンションのしき地にもお地蔵さんがありました。それで、今年はお京都のお地蔵さんについて調べることにしました。

まず、東京と京都のお地蔵さんの数をくらべました。引っ越す前に通っていた金沢小学校の学区と、今通っている御所東小学校の学区を板橋区役所、京都市役所のホームページで調べて、歩きながらお地蔵さんを探しました。その結果、金沢小の学区にはお地蔵さんはありませんでしたが、御所東小の学区には全部で26このお地蔵さんがありました。予想通り、東京より京都のほうが、お地蔵さんが多かったです。

金沢小の学区の中にはお地蔵さんはありませんでしたが、近くのお寺と、去年調べたうばがばしにありました。東京も京都も、お地蔵さんに花をそなえて、きれいにそうじしているのは同じでした。違った点は、東京は大きい通りやお寺にあるけれど、京都は町の人のお家のしき地にあること、東京のお地蔵さんは顔や体の形がはっきりしているけれど、京都のお地蔵さんは石に顔や体がほってあって、はっきりしないものが多いことです。京都のお地蔵さんには顔がわからなくて石みみたいなものや、顔が白くて口べにをしているかのように口が赤いお地蔵さんもあります。また、京都のお地蔵さんの前かけは赤だけではなく、白や黄色や水玉もようのものもあります。着物が着せてあるお地蔵さんもありました。京都のお地蔵さんのほころには格子戸があるところが多いです。かぎがかけてあるところもあります。

現在、京都市内にはお地蔵さんが1万體以上も残されているそうです。では、なぜ京都にはお地蔵さんが多いのか。私は京都には木造の家が多くて、火事が起こりやすいと聞いたことがあります。京都では、どの家の前にも赤い消火バケツがあるのもそのためだと思います。だから、火事が起きないように守ってもらうためにお地蔵さんがたくさんあるのではないかと思いました。歴史資料館の人に相談したり、図書館やインターネットで調べてみて、次のような理由がわかりました。

江戸時代の京都には、今のように大きな通りはなくて、道はせまく、道の両側の家でひとつの町になっていました。治安のため、町の両はしには木戸があって、木戸番がいました。木戸のそばにお地蔵さんがありました。その時代、災害として一番こわかったのは火災です。火事を出さないように、お地蔵さんに毎日、安全をお祈りしました。また、医りょうが発達していなかったの、弱い子どもたちを守ってくれるように、お地蔵さんにお祈

りました。それから、木戸のそばにお地蔵さんを置いて、町に悪いものが入ってこないようにしていたという理由も書いてありました。私の予想は少しだけ当たっていました。

京都には「地蔵盆」というお地蔵さんの行事があります。学校で「地蔵盆の絵のコンテスト」のチラシが配られて知りました。近所のポスターで地蔵盆の日時を知って8月19日と20日に2つの地蔵盆を取材しました。

8月19日の上京区A町の地蔵盆は9時から準備が始まりました。お地蔵さんを布でふいて、きれいにしていました。それから、写真を見ながらかざりつけをしていました。「昔のやり方だから写真を見ないとわからない」と町の人が言っていました。お地蔵さんの前には、ご飯、みそ汁、高野どうふの煮物、酢の物、つけ物のおぜんが置いてありました。9時半に準備が終わったら、町の人たちはおしゃべりをしていました。お坊さんが来るまでのおしゃべりが楽しいと言っていました。昔はお地蔵さんの向かいの家の格子窓を外して、ひな段に赤い布をしいてお地蔵さんをかざったこと、昔は通りに人がたくさんいてにぎやかなお祭りだったが、今は子どもが少なくなってこじんまりしたものになってしまったこと、今はコロナのえいきょうで地蔵盆を縮小しているということを知りました。10時半にお坊さんが来てお経をあげて、みんなでお祈りをしました。

8月20日7時半に上京区B町の地蔵盆に行きました。ドライバーでお地蔵さんの格子窓を外して、お地蔵さんを出していました。お地蔵さんをきれいにふいて、きれいな着物を着せていました。B町でもアルバムの写真を見ながらかざりつけをしていました。お地蔵さんの周りにかけてあるかざりの布は京都の西陣おりで、うらに明治34年という年ときふした人の名前が書かれていて、古いのでびっくりしました。お地蔵さんの前に果物と紅白のおもちを置いていましたが、町の人「最近、おぜんはしょうりゃくしている」と言っていました。8時半に準備が終わってかいさんし、9時20分にまた集合しました。9時半にお坊さんが来てお祈りして数珠回しをしました。10人ぐらいが円になって大きな数珠を持ち、お経に合わせて時計回りに数珠を回しました。白いかざりがついている部分が自分のところに来たら、それをおでこにつけます。お坊さんが「昔は一晩中やりましたが、今のは忙しいから3周回します」と言って、数珠を3周回しました。数珠回しのあと、お坊さんのお話がありました。終わってから、子どもにお菓子がくばられました。私ももらえてうれしかったです。

どちらの地蔵盆も参加者は20人以下で、子どもは数人でした。昔、子どもがたくさんいた時は、終わった後、水遊びをしたりしたそうです。おじいさん、おばあさんが多いから「おじいぞうさん」と呼んでいるとじょう談を言っている人もいました。子どもが少なくなると、地蔵盆が続くかどうか心配ですが、私は続くと思います。京都市が地蔵盆を「無形文化遺産」にして守ろうとしているからです。地蔵盆は地蔵ぼさつの縁日（8月24日）の前日を中心に行われ、最近では、参加する人たちの都合に合わせて、その前後の土日に行くところが多くなっているそうです。そうやって工夫して続くと思います。地蔵盆は江戸時代にはすでに行われていたそうです。昔からあるお地蔵さんも地蔵盆も大切にしてい

きたいです。

見た本

京都ふるさと伝統行事ふきゅうけいはつ実行委員会（2022）『京都の祭り・行事』
京都をつなぐ無形文化遺産ふきゅうけいはつ実行委員会（2015）『京の地藏盆ハンドブック』
わし頭まさ浩「京都で地藏盆が盛んなわけ」京都市文化市民局文化財ほご課『京都をつなぐ無形文化遺産』 <https://kyo-tsunagu.city.kyoto.lg.jp/jizo/jizo-column/jizo-column006/>
(2023年8月23日アクセス)



写真 上京区B町の地藏盆

わらべ歌、伝統工芸品でつながる絆

東京学芸大学附属世田谷中学校1年 中尾 仁南

“London Bridge is falling down Falling down, falling down London Bridge is falling down My fair lady”私達はケタケタ笑いながら友達が手で作ったロンドン橋を通り抜けて行く。幼少期の幸せな記憶だ。そこには、宗教や人種の垣根はない。ただ無邪気に手を取り合って日が暮れるまで遊んでいただけだ。私は英国籍を持つギリシャ系キプロス人の父と日本人の母のもとにロンドンで生まれた。四歳で日本に引っ越してからは日本の教育を受けている。日本、イギリス、ギリシャ、三つの言語と文化に触れて育ってきた。それぞれの童謡や童歌に、祖父母や友達との思い出がたくさん詰まっている。童謡やわらべ歌と共に、自分のルーツについて考えてみたい。

「この子はいらん子向こうのお山に飛んで行けー!!」掛け布団の真ん中に寝っ転がった私。祖父母が掛け布団の両端を高く持ち上げて、歌いながら揺らす。キャッキヤとはしゃいで「もっともっと」という私と、それを見守り、微笑む祖父母。3年前に他界した祖父との優しい思い出だ。母も私と同じように祖父母にこうして遊んでもらったそうだ。祖父母は福岡出身で、このわらべ歌も福岡のもので、祖父母が子供の頃から馴染みのあるものだそうだ。歌詞を深く考えると怖いのもかもしれないが、方言の響きやリズムに子どもを見守る愛情を感じられる素敵なわらべ歌だと思う。

「バンブルブンブル ナパメンスティアンタリヤ ナフェルメン クタリヤ ナファメンジェ ナピュメン ストガモティス ●●(子供の名前)」向かい合って父の膝に座り、後頭部を押さえてもらい、呪文のような曲に合わせて後ろに倒れ、最後はくすぐられるという遊びだ。意味は、叔母によると、アンタリヤ(トルコの地名)に行こう。スプーンを買って●●ちゃん(子供の名前)の結婚式に行ってごちそうを食べよう、というそうだ。ギリシャ本土で使われている標準ギリシャ語とは全く異なり、トルコ語やアラビア語、ラテン語等の影響を受けたキプロス独自の方言だそうだ。これは地中海沿岸のさまざまな国の支配を受けてきた歴史的背景が関係している。また、食べることや盛大な結婚式などのお祭り騒ぎが大好きな国民性が反映されているのも興味深い。不思議な言葉の響きの面白さと、最後のくすぐりが好きだったので、「パパ、バンブル!」とよく頼んでいた。キプロスに住んだ事のない自分にとって、ルーツを感じる事のできる大切なわらべ謡だ。これらの歌を思い出す時蘇るのは手の温もりや笑い声、穏やかな笑顔。辛いことがあった時、心の支えになってくれる大切な栄養だ。動画では伝わらない温かさを次の世代に伝承していきたいと思う。

この夏、私はキプロスの祖母と過ごしている。よく晴れた日曜日の午後、庭で祖母とおしゃべりしていた。ふと、私が生まれる前に他界して会ったことのない曾祖母について聞いてみた。すると叔母と祖母が大きなクッキー缶に入った、たくさんのレースを見せ

てくれた。それは「レフカラレース」という伝統的なレースで、先祖代々女性に受け継がれてきた大切な宝物だそうだ。15世紀頃、ヴェネチアの貴族から伝わった刺繍と元から島にあった刺繍がレフカラ村で融合し、より美しく発展したのがレフカラレースだという。1mのレースを作るのに半年以上の時間を要するため、継承者が減っており2009年、ユネスコ無形文化遺産に登録された。

曾祖母のレースを手に取り、どのような思いで一針一針運んだのか、彼女の人生を知りたくなった。彼女の名前はアンナ。1923年、今からちょうど100年前、キプロスの小さな村で生まれ、ペンキ職人の曾祖父と結婚した。7人の子供をもうけたが、曾祖父は仕事中にハシゴから落ち、死別した。親族に頼る事無く、10歳から1歳までの7人の子供たちを連れ村を出て仕事を求め、首都ニコシアに向かった。当時のキプロスはイギリスの植民地だったため、彼女は裕福なイギリス人家庭のメイドの仕事を得て、朝から晩まで働いた。小さな一部屋で8人家族。暮らしは貧しくアンナは忙しかったけれど、7人の子供一人一人に愛情をたっぷり注いだそうだ。兄や姉たちは小さな弟や妹の世話をし、寂しかったことはなかったという。貧しく、おもちゃも持っていなかったけれど、缶蹴りや近所の探検をしたりするのはとても楽しかったそうだ。助け合い、分かち合って生きた幼少期が一番幸せだったと言う祖母の言葉が印象的だった。しかし、政府の方針で祖母の当時7歳の兄が一人、孤児院に連れて行かれた。アンナは抗議したが、政府は「シングルマザーが育てるのは6人まで」と譲らなかった。アンナは、裁判所にも救いを求めたが、願いは叶わず遠くの街の孤児院まで、毎週面会に訪れる日々が続いた。祖母は毎晩彼女の涙を見たという。5年たったある日、12歳になった彼がボロボロの姿で家に戻ってきた。何日も孤児院の屋根裏に隠れて脱走に成功したのだ。何日も歩き続けて、たどり着いた彼を家族は泣いて迎え入れた。幸い、彼が孤児院に連れ戻されることはなかった。その後の戦争で息子達が捕虜になるなど、時代に翻弄された壮絶なアンナの人生だったが、どんな時も彼女はレースを編み続けた。手に取ったレースに曾祖母の深い愛情を感じ、誇らしく思った。彼女が必死で守った命は祖母、父、私へとバトンのようにしっかりと受けつがれているのだ。

早速私も祖母にレース編みを教えてもらうことにした。ソファーに並んで座り針を持ち、祖母は曾祖母にレース編みを教えてもらった日の思い出話を聞かせてくれた。「私は不器用だったから、できるようになるまでとても時間がかかったの。それでも私の母は優しく教えてくれたのよ。」祖母の笑顔に写真で見た曾祖母の面影を感じた。心がじんわり温かくなった。今日の私と祖母のように、数十年後の私も子供や孫に思い出や伝統を伝えたいと、未来に思いを馳せた。

祖母に昔の話を聞いてみて、昔の生活や曾祖母の人生、伝統の大切さ、様々なことが分かった。色々な人に昔の話を聞いたり、自ら調べたりすることで視野を広げることができた。何でも作るよりも買った方が安い、動画で子守をした方が楽、といった合理性や効率ばかりが重視される時代だけれど、消えつつある伝統を伝えていきながらこれからも発展させ、次の世代に繋げていきたい。わらべ歌や伝統工芸品には国や人種関係なく、子供へ

の愛が詰まっている。国際化とともに私のような多様なバックグラウンドを持つ人々が増えている。国内だけではなく、様々な国の伝統に触れる機会が増えるという楽しみもあると思う。様々な地域の文化を知ること、知らなかった土地に興味を持ったり他者への理解を深めることができる。多様性の未来を生きる私たち世代は、より良い社会を作るために互いの違いを尊重し、手を取り合っていきたい。

〈参考URL〉

UNESCO Lefkara Laces or Lefkaritika

2013年8月20日

<https://ich.unesco.org/en/RL/lefkara-laces-or-lefkaritika-00255>



毛呂山町のお地蔵さんの現状とこれからの課題

毛呂山町立泉野小学校4年 岩野 満優

毛呂山町は埼玉の西部に位置する町で、ゆずの栽培が盛んです。祭りとして有名なものは、11月に行われる流鏝馬です。今回取り上げた石仏は、町のあちらこちらで見られるお地蔵さんです。正しくは地蔵菩薩というそうです。お地蔵さんは、身近に見られるため特に注目されることもなく、見過ごされることが多いと思います。

ある出来事が、石仏に関心がなかったほくに「なんで」「どうして」と思わせ、調べさせるきっかけになりました。その出来事は、川角という地区に住むおばあちゃんの家の近くにある石仏でした。ほくが3年生のころ見たときはなんでもなかったのに、今年その場所に行ってみると、3分割されて置かれていました。なんでこんなことになったのか、ほかのお地蔵さんはどうなのだろうそう思うと、たまらず調べようと思いました。

まずしたことは、町内のどこにお地蔵さんがあるのかを知るために、町の歴史民俗資料館へ行き、探し方のアドバイスを受けました。所員さんは、「町内を20か所のエリアに分けて探すと漏れがなく探せるよ」と、教えてくれて、文化財となっている有名なお地蔵さんのことを話してくれました。

調べてみると町内には、136体のお地蔵さんを確認することができました。彫られた年号から1600年代から建立が始まり、1900年代まで続き、1700年代に建立されたものが一番多かったです。20地区のうち建立数が多い地区が3か所見られました。3地区のうち2か所は、町内でも山間部と呼ばれ生活の便が悪いところで、その地区から登校する児童のために、バスが出ています。

お地蔵さんを建立した人の数を調べてみると、個人が38体、村や・惣が25体、僧が14体と彫られた文字から確認することができました。今と違って、お地蔵さんにたいする信仰のようなものが強かったかもしれないです。

町内でみられる136体のお地蔵さんの現状ですが、摩耗して年号などが不明なものも含め、形がほぼ完全なものが100体ありました。欠損・補修のあとがあるものが26体、風化や摩耗がひどいものが10体ありました。資料館の人が、昔廃仏稀釈運動があつて、仏像などをこわしたという話をしてくれました。でも町内のお地蔵さんはあまりこわされていないので、なんでという新たな疑問がでてきました。理由を調べるために廃仏稀釈運動をウィキペディアでさがすと、運動には地域差があり、暮らす人たちの知識が高いと破壊運動が低調だったと書かれていました。町内には、江戸時代多くの寺子屋があつたそうです。ほくが通う学校のそばにも、寺子屋の先生だった人の筆塚があります。寺子屋の数が知識の高さをあらわしているのかもしれないです。

おばあちゃんの住む川角地区にあるお地蔵さんには、赤い帽子をかぶり、よだれかけを身につけているものが多く見られました。また、六地蔵の前にお供え物が置かれていたり

します。ほとんど見られない地区も多かったので、地区により大事にする温度差があるのかな。欠損のないお地蔵さんも、風化や摩耗が見られ年号などが読みにくくなっていました。屋根がある場所にお地蔵さんがある地区が9地区・屋根のない場所に建立されている地区が10地区ありました。単体のお地蔵さんが屋根のある場所にいた地区が1地区しかなく、屋根付きの場所にいるお地蔵さんの多くは六地蔵でした。また赤い帽子などを身につけているお地蔵さんは、六地蔵が多かったです。

川角のお地蔵さんを壊した人は、わざとしたのかわからないけど、お地蔵さんを含めた石仏に関心を持たない人が多いように思います。ほくも3分割されたお地蔵さんを見なければ調べてみたいと思わなかったからです。関心のない人達に、関心を持ってもらうためにほくは、以下のことを考えてみました。

一つ目として、町の広報誌にどんどんお地蔵さんやせきぶつのことを紹介する記事をのせる。

二つ目として、歴史民俗資料館でお地蔵さんや石仏に触れる機会を増やす。

三つ目として、地域でお地蔵さんや、石仏が建立されている場所の清掃などを行う。より効果的だと思うのは、インターネットで調べた関西地方で行われている行事「地蔵盆」のようなものを、町でも積極的に取り入れるといいと思います。お地蔵さんに色を付ける、化粧地蔵はかわいいと思いました。

早く保存して欲しいと思ったお地蔵さんが一体ありました。太子堂という所に建立されているのですが、200年以上たっているのにほとんど風化・摩耗がみられないきれいなお地蔵さんです。

話を聞いた人

毛呂山町歴史民俗資料館の学芸員さん

参照した本

毛呂山町史

毛呂山町の文化財

参照したサイト

・京都をつなぐ無形文化遺産

<https://kyo-tsunagu.city.kyoto.lg.jp/>

・ウィキペディア

廃仏毀釈

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BB%83%E4%BB%8F%E6%AF%80%E9%87%88>



資料1 地蔵菩薩年代別建立数

種類	建立年代	建立数
地蔵菩薩	年代不明	10体
地蔵菩薩	1600年	4体
地蔵菩薩	1700年	78体
地蔵菩薩	1800年	38体
地蔵菩薩	1900年	6体

資料2 町内のお地蔵さんの現況

完全な形（摩耗・少しの風化あり）	100体
欠損（補修あり）	26体
風化・摩耗がひどいもの	10体

資料3

江戸時代の村の数	13村
師匠の数	27人
寺子屋の数	27教室

毛呂山町史から引用

資料4 地蔵菩薩を建立した人達

個人	38人
惣	20組
村	15村
僧侶	14人

彫られたものが読み取れたもの

資料5 地区別地蔵の形、種類、建立数

地区名	地蔵の形	地蔵の種類	建立数
苦林地区	立像	浮彫・丸彫	9体
西戸地区	立像・座像	浮彫・文字	5体
箕和田地区	立像	丸彫・浮彫	2体
川角・玉林地区	立像	浮彫・丸彫	2体
大類地区	立像・笠付角	浮彫・丸彫	6体
川角・旭台地区	立像・角	丸彫・浮彫・文字	5体
西大久保地区	立像・駒	丸彫・浮彫・文字	6体
市場地区	立像	丸彫・浮彫	5体
下川原地区	笠付角	浮彫	1体
前久保地区	立像	丸彫	3体
岩井地区	立像	丸彫	4体
沢田地区	立像・座像・笠付角	丸彫	4体
長瀬地区	立像・座像	丸彫・浮彫	12体
小田谷地区	立像・座像	丸彫・浮彫	13体
毛呂本郷地区	立像・座像	丸彫・浮彫	8体
葛貫地区	立像・笠付角	浮彫	7体
大谷木地区	立像・石幢	丸彫・浮彫	7体
宿谷・権現堂地区	立像	丸彫・浮彫	6体
阿諏訪地区	立像	丸彫・浮彫	16体
滝ノ入地区	立像	丸彫・浮彫	15体
合計			136体

受け継がれて来たほこらに目を向けて

板橋区立志村小学校6年 坂東 俊祐

ぼくの家近所に、小さなほこらがあり、ずっと気になっていました。そのほこらは、よくそうじされているので、どのような神様で、どうして建てられたのか、調べてみることにしました。

まず、近所に住んでいる橋本さんにこのことをうかがいました。橋本さんによると、このほこらを管理しているのは市川さんだとわかったので、市川さんにもうかがいました。市川さんによると、このほこらの神様はお稲荷様で、建てられた理由は、明治時代、この辺り一帯は畑が広がっていて、家は数けんしか建っていませんでした。その家々は農家だったので、農業の神様として建てられたのだそうです。また、市川さんの家では二月の最初に「初午」というお稲荷様が山から田に返ってくるために赤飯や鯛を食べて祝うお祭りをやっているそうです。この「初午」は二月に2、3回くらい行われていて、行う日は年によって違いますが、今年（令和五年度）の「初午」は、二月十二日、「二の午」は二月二十四日だそうです。

ぼくは、この話にとってもおどろいたので、図書館に行って調べました。板橋の歴史がくわしく書いてある「図説板橋区史」によると、明治四十二年の志村の農民の日記の記録で、「下肥を東京市中に求める一方で、畑作を中心とした栽培作物を供給することにより、帝都東京の台所として大きな役割をはたした。」と記されていました。また、市川さんの「明治から大正ごろに志村に引っこして来た。」ということから、この辺りの志村は昔農村であったことが分かります。さらに、昔の地図からもこの辺りで農業が行われていたことが分かります。地図①が明治十三年の地図で、地図②が昭和四十五年の地図です。黒点が志村坂上駅を示しています。この二つを比べてみると、明治十三年はすべて田になっているのに対して、昭和四十五年はどんどん開発されていって住宅地が多くなっていったのが分かります。これらの資料から、志村は明治時代は農地だったことが分かりました。

また、なぜ農業の神イコールお稲荷様なのか、と疑問に思ったので、それも図書館で調べました。最初、ぼくはお稲荷様のことは神社にいる神様だとはしか思っていなかったのです。しかし、本当はお稲荷様は平安時代は伊奈利と書かれていて、江戸時代になるにつれて稲成、稲生、稲荷となっていったように、江戸時代の名前では稲の字がつくので田に関係があると分かりました。江戸時代中期のお稲荷様は田の神様でした。そこから江戸時代後期になると、お稲荷様は田の神様だけではなく、色々な神様になりました。例えば、商業人は商業はん栄を願うので、商業はん栄の神様になったり、漁村では大漁を願うので、漁業神になったりと、それぞれの生業に応じて様々な神様になりました。今回のほこらは市川さんの話より、お稲荷様の中でも田神稲荷という種類のお稲荷様だと分かりました。この田神稲荷というのは実は山の神が里に降りて田の神となり、田畑の間に神社などを構

えるお稲荷様のことです。今回は神社ではなく、ほこらでまつっていました。

僕は最初、橋本さんや市川さんの話を聞く前はほこらは江戸時代の道を守る神様だと思っていましたが、予想から大きく外れていて、さらに昔はここは農地だったと聞いて、とてもおどろきました。また調べているうちに、自分の住んでいる地域の歴史を知り、より一層興味を覚えました。これからは初午などの行事を楽しみ、この辺りの歴史にもっとふれていきたい、と思いました。

〈参考文献〉

図説 板橋区史

稲荷大明神 中村陽 著

大黒信仰 大島建彦 編

日本図誌大系 関東 I 山口恵一郎・佐藤侑・沢田清・清水靖夫・中島義一 編

協力して下さった橋本さん、市川さん、ありがとうございました。



写真 近所のほこら

地図① 明治十三年 日本図誌大系 関東 I



地図② 昭和四十五年 日本図誌大系 関東 I



和敬保育園の地蔵盆はなぜおこなわれているのだろう？

板橋区立志村小学校 6年 島 千晴

私は自分が通っていた和敬保育園の地蔵盆について調べようと思いました。なぜなら、和敬保育園は古いので、そこで行われている地蔵盆も古い行事なのかなと思ったからです。

和敬保育園は1937年に貧しい母子家庭のための母子寮とその子供たちを昼間預かる保育園としてつくられました。そして今年で86年になります。入り口の横に二体のお地蔵さんがいて子供たちや親たちが毎日拜んでいました。

地蔵盆は私にとってとても楽しい思い出です。地蔵盆は7月の終わりに行います。南蔵院の住職さんにお経を読んでもらったあとに、浴衣を着た在園児や卒園した子供たちみんなが手を合わせてお祈りしました。その後みんなと遊んだりお菓子を食べたりラムネを飲んだりしたことが忘れられません。そこで和敬保育園の地蔵盆について調べようと思いました。

まずそもそも地蔵と地蔵盆とはなにか調べました。地蔵とは子供を守る仏、地蔵菩薩のことです。地蔵盆はお地蔵さんの縁日の8月24日にお地蔵さんに日頃のお礼と「これからもよろしく願います」を伝える行事だそうです。室町時代に流行したとも江戸時代に盛んだったとも言われています。京都、滋賀、大阪、兵庫など近畿地方で行われていました。子供たちが寺や地域でまつられているお地蔵さんに新しい衣装を着せ、化粧をしたりお花や果物などの供えものをしたりします。そしてそこで遊んだり念仏を唱えたりするものでした。もしかしたら晴れ着としてお地蔵さんにメイクをしたのかもしれない。今も京都で行われています。

近畿地方で行われてきた行事をなぜ東京でやっているのか不思議に思いました。そこで和敬保育園に行って地蔵盆を始めた理由を聞いて来ました。副園長の小林弘子先生と元主任保育士の四ツ谷信子先生が答えてくれました。

一つにはお地蔵さんの由来が関係していました。

お地蔵さんは二体あります。一体は1942年に保育園の主事となった近藤糸子先生のお地蔵さんです。糸子先生は戦中、戦後と保育園と子供たちを守り続けて「ママ先生」と慕われていました。1978年にお亡くなりになり、供養のためのお地蔵さんがつくられました。そのお地蔵さんはまりを持った赤ちゃんを抱えています。もう一体のお地蔵さんは1942年に母子寮長と保育園長となった近藤一男（かずお）先生のお地蔵さんです。1983年にお亡くなりになり、供養のためのお地蔵さんがつくられました。そのお地蔵さんは守るように子供たちを抱きかかえています。どちらも子供を守って慈しむ姿から子育て地蔵と呼ばれています。一男・糸子先生ご夫妻が京都の出身だったので、京都の子どもたちの楽しみである地蔵盆を和敬保育園でも開こうということになったそうです。

もう一つは戦争の体験からでした。

1945年、東京大空襲の32日後の4月13日の夜に板橋に再び大空襲がありました。保育園の裏に爆弾が落とされ、焼夷弾が降りそそぎました。そして本蓮沼から5 km以上先の巣鴨や池袋まで見渡せるほどの焼け野原になったそうです。周りは全焼しましたが幸いにも保育園は焼けずに残りました。今もその建物のまま使っています。子供たちの未来に戦争がないようにという願いで地蔵盆を行っているそうです。

小さい頃、私は地蔵盆を子供にとってのご褒美の楽しいお祭りだと思っていました。けれど先生の話聞いて先生たちの大きな願いが込められている大切なお祭りだという事が分かりました。

今も和敬保育園のお地蔵さんは保育園の子供たちや先生たちを見守ってくれる存在です。子供たちは、公園に行くときには「お地蔵さま行って来ます」、帰ってきたときには「お地蔵さまただいま」と挨拶しています。先生たちも外の公園やプールに子供たちを連れて行くときに「怪我なく帰ってこられますように」と今も必ずお地蔵さんにお祈りしているそうです。

新型コロナウイルス感染症の対策で地蔵盆は園の子供たちだけでこじんまりと行っているそうです。感染症の心配がなくなって、昔みたいに卒園児も行けるようになったらぜひお参りに行きたいです。



和敬保育園の入り口のお地蔵さん（子育て地蔵）



糸子先生のお地藏さん



一男先生のお地藏さん



地藏盆の様子



近藤一男先生と糸子先生ご夫妻

三園小学校と地域の歴史

板橋区立三園小学校 6年 馬場 奏汰

私は三園小学校の、みんなが仲良く元気なところが好きだ。今年が私の小学校生活最後の年であり、父とその兄弟、そして祖母が三園小学校に通っていたので、今回三園小学校について調べてみようと思った。インタビューしたのは私の曾祖母だ。曾祖母は三園小学校の校庭づくりに参加していた。

まず私は、三園小学校をつくることになった理由を聞いた。曾祖母は現在の三園小学校がある場所付近に団地が出来たことがきっかけであると答えた。その後、入居してきたたくさんのおともたちは全員成増ヶ丘小学校に通うことになった。しかし、このままおともが増え続けると、成増ヶ丘小学校だけでは足りなくなってしまうという問題が発生した。そのため、団地の近くに小学校をつくることになったのである。そうして完成したのが、今の三園小学校だ。

二つ目に、三園小学校にあるとても広く、大きな校庭はどのようにして作られたのかを聞いた。校庭は二十から三十人程度で作上げたそうだ。地ならしを行う作業で、私はすごいなと感じた事がある。それは、曾祖母の時代のPTA副会長の女性がブルドーザーという大きな機械を使って行ったということだ。他の人たちも、リアカーなどの機械を使って作業を進めたそうだ。

三つ目に、ボールなどを校庭で使えるようになるまでのできごとを聞いた。初めに地域の人から古新聞を回収して売った後、ボールを買って学校に送ったそうだ。このときに、いやな事を言われることもあったそうだが、私の曾祖母は、あきらめない心を持ち、おともたちが楽しく勉強したり遊んだり出来るようにがんばったそうだ。この話を聞いて私は、ありがたく感じ、そして感動した。

四つ目の質問は、三園小学校を建てる理由が決まったときよりも、少しさかのぼり、三園小学校や団地がある場所は、かつて何があったのかというものだ。その時代、現在の三園小学校周辺はほとんど田んぼで、少しのれんげ草畑があった程度で今とは全く違ったようだ。その田んぼは、今で言うおともたちの遊び場であり、おともたちは、カエルを探し回ったり、お花をつんだり、今とは違う遊びを楽しんでいたそうだ。三園小学校のビオトープの後ろには、かつて牧場があり、牛がたくさんいたという。その場に植えていた桜の木が今も白子川沿いに植えられていると知り、なんだかうれしい気持ちになった。

五つ目の質問は、三園小学校のまわりのことから離れ、私の住んでいる家の近くについてだ。私が通っていた成増幼稚園は長らく田中家が園長先生をしており、その家系がもつ古民家について調べ、成増幼稚園の土地はかつてどのようなことをしていたのかを聞いた。まず古民家は、江戸時代くらいからあり、今は板橋区の有形文化財となっている。次に、成増幼稚園は、かつて年に数回その土地を治めるおとのさまが来て、年貢をしっかりと出せ

るかなどを確認する重要な場所だったそうだ。

今回、インタビューを通して、たくさんの方が協力して今ある三園小学校を作ってくれていたと知り、とても感動した。私の家の近くに昔、おとのさまが来ていたと知りとてもおどろき、歴史をふり返るといろいろなおもしろいことを知ることができてすごいと思った。そして、質問に対してくわしく答えてくれた曾祖母や三園小学校を作るのに関わった全ての人たちに、「ありがとうございました。とても学校生活を楽しめています。」と感謝したいと強く思った。

日本とメキシコのお盆のきょう通点とちがい

板橋区立弥生小学校3年 裕下 依都

夏にはお盆休みというき間があります。

私の小学校の夏休みは七月二十一日から八月三十一日までですが、大人のお休みはお盆休みと言われます。今年のお父さんのお盆休みは八月四日から八日でお盆より少し早目にとったようです。お盆とは何か知らなかったの、調べてみようと思いました。お母さんがディズニーえい画の『リメンバー・ミー』はメキシコのお盆の話だと教えてくれたので、さい度えい画をみてメキシコのお盆についても調べてみました。

まず、メキシコのお盆は、“死者の日”とよばれます。き間は十一月一日から二日です。むかしメキシコにすんでいたアステカ人のおまつりと、キリスト教のカトリックの祝日がまざって死者の日になったそうです。

死者の日にはオフrendaと言われるさいだんを作って、亡くなった人がすきだった食べ物、亡くなった人のしゃ真、マリーゴールドやケイトウなどのお花をきれいにかざります。カラベラとよばれるガイコツの人形をかざったり、カラベラのかそうをしたりしてパレードを楽しみます。カラベラは生きるよろこびを実感するための物で、えい画の中でもカラフルでこわくありません。地方によっては、十月三十一日から十一月一日が子どものたましいをむかえる日になっているそうです。死者の日は明るく楽しいふんい気で亡くなった人をむかえ、思い出して、家ぞくのきずなをふかめる日です。

次に、日本のお盆は八月十三日から十六日ころです。ぶっ教のうら盆（先ぞのたましいをまつる行事）と日本の先ぞまつりの風しゅうがまざって今のお盆になったそうです。先ぞまつりとは、家ぞくがあつまって、しゅうかくした食べ物を先ぞにささげる風しゅうです。ぶっ教のおこったインドではお盆がないそうです。

むかえ火で亡くなった人のたましいをよび、おくり火でたましいをまた次の世におくると言われています。盆おどりは亡くなった人をおこらせてたたられないように気持ち良く帰ってもらうための意味があると知りました。私はむかえ火やおくり火をしたことはありませんが、できる時は家ぞくでおはかまいりをします。また、今年は町内のおまつりで盆おどりをしました。

日本とメキシコのお盆できょう通しているのは、元々すんでいた人の風しゅうと海外からきた考えが合わさって今の形になったことです。また、日本では、盆おどりやおまつりをしますが、メキシコでもパーティーを楽しみます。はんたいにちがうところは、メキシコでは、おはかやさいだんにかざる花はオレンジ色のマリーゴールドではなやかですが、日本ではキクやユリなどの白い花が多いのでしずかで落ち着いたふんい気なことです。

調べてみて、メキシコでも地方によってお盆のやり方がちがうことが分かったので、日本でもそうなのかなと思い、家ぞくに聞いてみました。お父さんの実家は岩手なので、岩手のおば

あちゃんに聞いてみたら、岩手のお盆はおはかまいりをしておはかで食事をしているそうです。食べる物は、持って行ったお赤はんやに物、くだ物や和がしです。さんさおどりと言う盆おどりがります。また、舟っこながしという行事があつて、はば二メートル長さ六メートルの舟を北上川でながしてさい後にもやすことで、亡くなった人をくようするそうです。

お母さんの実家東京では、おはかで食事はしません。また、岩手のお赤はんはあまい味つけですが、東京のお赤はんはあまくなく、ごましおをかけて食べます。私はあまい方が好きです。

さい後に、私は小さいころに岩手でおはかまいりをしましたが、毎年帰るわけではないので、あまりおぼえていません。だから、来年は岩手に行って、お盆のおまつりや行事を体けんしてみたいと思いました。お盆について知ること、かく地の盆おどりやおまつりが、お盆とかんけいがあると分かり、さらにきょう味を持つことができました。

夏のすずしい洋服の工夫

板橋区立緑小学校3年 山谷 桜子

わたしは、ファッションが大好きです。だから、洋服のことを学びたいし、すずしい着方もあることを知り、みんなにもつたえていきたいと思います。

どうしたらあつくてもすごしやすく着られる服か調べました。インドネシアのバリ島のテンガナン村の人の服は長方形の大きいぬの、小さいぬの、細長いぬのなどを、こしやむねにまいたり、たらしたりします。男の子も女の子も、同じようにぬのをまきます。

あつくて毎日何回も水浴びするこの地では、広げると1枚のぬのになるこの服がかわきやすくべんりです。

インドはとてもあつく、43度になる日もあります。サリーは長さ5m、はば1mのぬのを使うまきスカートです。こしにまくだけではなく、かたや頭もつづけてまくような着方が工夫されています。着てみると、下から風が入り、うすい素材なのですずしかったです。

トルコには、シャルワールというふわっとふくらんだ大きなズボンがあります。服のとくちょうはスカートみたいに広がるけれどズボンです。わかりやすくイメージを伝えると、「アリババと40人のとうぞく」の人たちがはいているようなズボンなのです。じっさいに着てみるとカボチャみたいなシルエットで、とても動きやすくすずしいです。

インドネシアの服はかわきやすく、インドの洋服は着てみて下から風が入ってきてすずしかったです。トルコのシャルワールはふくらんで動きやすく、あせがかわきやすいです。この三つのきょうつう点は空気に触れる場所が大きいことです。

現代の日本の洋服で工夫されていることは何でしょうか？ 夏になるとワンピースが多く出ています。上から下へと空気がながれるから、あせがかわきやすく、すずしくすごせます。

せなかがあいているTシャツもあります。せなかには、あせをかきやすい場所です。あせをかいたせなかに風がふくとあせがひやされて、すずしく感じるのです。

さいきんでは、「ネッククーラー」というアイテムが人気です。これは、洋服ではなく、ひんやりとした保冷くびわです。くびには大きなけっかんがとおっていて、そこをひやすと体かん温度が下がるのです。

今回、洋服の本をたくさん読みました。そして、じっさいに使わなくなったカーテンでトルコのシャルワールを作りました。じっさいに着てみると、すずしくてすきになりました。インドのサリーも着てみると、頭までかぶるので、日ざしからはだを守ってくれることがすばらしいなと思いました。

これからも世界の洋服を調べようと考えました。

えんきりえのき

板橋区立緑小学校3年 中村 璃子

私は、かいだんやこわい話が好きです。作文を書くため何かあるかなと調べていたところ、お母さんから板橋区に「えんきりえのき」とよばれる木があることを教えてもらいました。私は、「えんきりえのき」という名前がおもしろそうだったので、調べようと思いました。

なぜ「えんきりえのき」とよばれるようになったのか。まずさいしょに中央図書館に紙しばいがあったのでかりました。「えんきりえのきと身ろくさん」という紙しばいにはこのようなお話が書いてありました。身ろくさんはけっこんして文京区で油屋をはじめ、大はんじょうしていました。むすめも二人生まれ幸せにくらしていました。しかし身ろくさんは子どものころからふじの神様を深く信じていて、「ふじ山で死にたい。」とねがいをかけていたため、心をおににして家族をすて、家をとび出しました。その後、家族は身ろくさんをおいかけ、板橋でおいつきました。身ろくさんの決意がかたいことを知り、そこにあった大木でわかれることになりました。それからこの大木が「えんきりえのき」とよばれるようになりました。身ろくさんはねがいの通り、ふじ山で亡くなったと言われています。

次に、板橋区公文書館へ行きました。ここは、「えんきりえのき」の近くにありました。係の方に相だんして本を見せていただきました。そこには大六天神のご神木と言われしよみんの間では、「悪いえんを切り良いえんをまねく」と親しまれていたと書かれていました。昔はしょうぐんのおよめいりのときに、えんぎが悪いと言われ遠回りしたことも書かれています。

私は悪いえんを切ることはわかりましたが、どうして良いえんとつながるのかふしぎに思いました。身ろくさんは家族は大切だったと思いますが、それいじょうに神様とえんをつながりたいという気持ちだったと思います。また、しょうぐんも正室も家族を大切にしたいという思いから道を変えたのだと思います。悪いえんを切って良いえんとつながりたいという強い心を持つきっかけを「えんきりえのき」が作ってくれているのかなとも思いました。

さい後に「えんきりえのき」を見に行きました。小さな場所に大きなえのきがたくさんの元気な葉をつけていました。そこにはおまいりする人も多くいて私もならんでおまいりしました。家族やお友だち良いえんがずっとつづくといいなと思いました。

「えんきりえのき」はさいしょこわく感じましたが、みんなから大切にされている場所なんだと思いました。

中台さとやま公園でひろったハニワの破片について

板橋区立緑小学校3年 藤波 健

ぼくのかよっている緑小学校の広報をよんで緑小学校のまわりにたくさんむかしのいせきがあることをしりました。そのなかでハニワについて知りたいと思いました。緑小学校のとなりの日大豊山女子校から大きなハニワがでていたようでした。そこで8月21日にお父さんとそのまわりをみてることにしました。でもまわりは家ばかりで、あまりみてまわる場所はありませんでした。そのなかで「中台さとやま公園」に土が出ているところがありました。急な坂が多い公園です。中を歩いてみると焼き物の破片が見つかりました。写真をとってその破片をビニール袋に入れました。もうすこし歩いてみたら20こぐらいひろうことができました。とてもあつく蚊もたくさんよってきてたいへんでした。

家にかえってひろってきた焼き物のかけらをいらなくなった歯ブラシで1こ1こ洗いました。洗いかたは歯ブラシでゴシゴシ洗うのではなくたたくようにドロをおとしていきます。

かわいたら1こずつ写真をとります。

そのあと種類でわけます。ひろった物は円筒ハニワとよばれるもののかげらと縄文土器でした。

ひろった円筒ハニワと広報の写真をくらべるとあまりにちがいすぎてよく分かりませんでした。

よくわからないので古墳で有名なさきたま古墳ぐんに行ってきました。

さきたま古墳ぐんに行ってみると大きな古墳がたくさんあるのにおどろきました。なかでも丸墓山古墳は上るのもたいへんな高さの古墳でした。日本最大にちかい円形の古墳だそうです。

稲荷山古墳は文字の入った国宝の鉄剣が見つけれられた古墳で前方後円墳という形の古墳でした。

古墳を見たあと、さきたま史跡の博物館にいったかたちのわかる円筒ハニワをみてきました。まるい穴のあいたばしょや、ぐるっと、よこにはりつけた帯のようなばしょがあることがわかりました。円筒ハニワのほかにも人に形をしたハニワや馬の形をしたハニワなどいろいろな形をしたハニワがあるのにおどろきました。

ひろったハニワは円筒ハニワの丸く穴のあいたぶぶんがついているものが2こあることがわかりました。

土器やハニワはほらないと見つからないのかと思いましたけどコロコロ落ちていることがわかりました。

これからは、もっとまわりの遺跡を歩いてみたいと思います。



※編集付記

今回発見された遺物は埋蔵文化財であり、国民共有の財産であるため、発見者から板橋区立郷土資料館へ寄贈いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。